

# 調査報告

## 群馬県内小・中学校における 「総合的な学習の時間」の実施状況と 成果に関する調査の結果と考察

### 調査概要

#### 調査目的

「総合的な学習の時間」のカリキュラム評価の進め方を研究するに当たり、その基礎資料を得るために、県内小・中学校における「総合的な学習の時間」の実施状況と成果や課題に関する調査を行う。調査内容については、事前に総合教育センター研修員を対象に行った意識調査の結果を参考にした。

#### 調査内容

##### カリキュラムの整備状況について

- ・ 目標や内容、育てたい資質・能力・態度の設定、年間活動計画の作成、各教科等との関連について
- ・ 評価の観点、評価規準の作成について
- ・ 評価方法について
- ・ 評価の活用について

##### 学習成果としての児童生徒の変容について

##### 育てたい資質・能力・態度の学校外部への説明について

「総合的な学習の時間」の充実や改善に関する学校課題について

#### 調査方法

調査依頼書と調査用紙を該当校に郵送し、回答は、Web ページ上で行えるようにした。

調査対象：群馬県内公立小学校・中学校107校（小学校71校、中学校36校）

\* 県内の小・中学校から全体数の20%を無作為に抽出して実施した。

回答数：102校（小学校68校、中学校34校）＜回答率95%＞

#### 調査期間

平成15年9月29日～平成15年10月10日

# カリキュラムの整備状況

## 1 目標、内容、育てたい資質・能力・態度、年間活動計画、各教科等との関連

### ● 結果と考察

次の各項目が設定してあるか。

- ・学校としての目標 (質問1)
- ・学年の目標 (質問2)
- ・育てたい資質・能力・態度 (質問3)
- ・評価の観点 (質問6)
- ・評価規準 (質問7)
- ・発達段階に応じた学習内容 (質問10)
- ・年間活動計画 (質問11)

「育てたい資質・能力・態度」「年間活動計画」は、  
小・中学校とも約9割が設定

「設定してある」と回答した割合  
が高い項目は、

学校としての目標

(小学校84%、中学校82%)

育てたい資質・能力・態度

(小学校96%、中学校85%)

発達段階に応じた学習内容

(小学校94%、中学校82%)

年間活動計画

(小学校100%、中学校94%)

である。一方、まだ設定していない学校(「検討中」「計画はない」)

が比較的多く見られる項目は、

学年の目標

(小学校25%、中学校30%)

評価の観点

(小学校22%、中学校32%)

評価規準

(小学校39%、中学校59%)

である(図1、2)。

これらのことから、ほとんどの学校では、試行期間も含めたこれまでの間に、「育てたい資質・能力・態度」や「発達段階に応じた学習内容」を設定し、「年間活動計画」の作成を先行させてきたことが分かる。そのため、学校によっては、今年度もカリキュラムの整備に向けて、「学年の目標」や「評価の観点」、「評価規準」の設定等に取り組んでいるものと思われる。

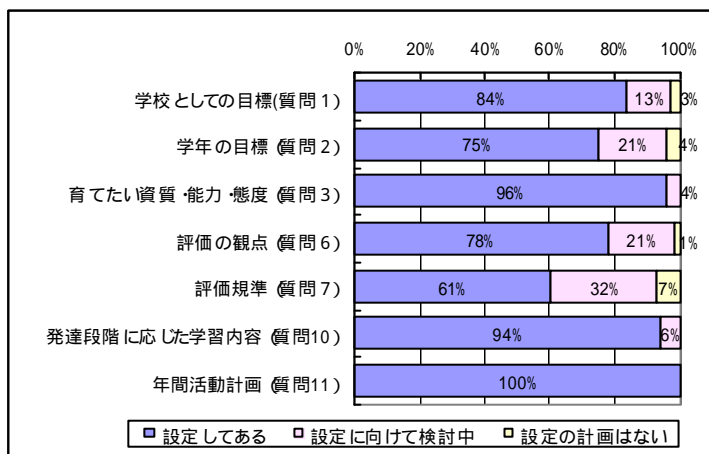


図1 カリキュラムの整備状況(小学校)

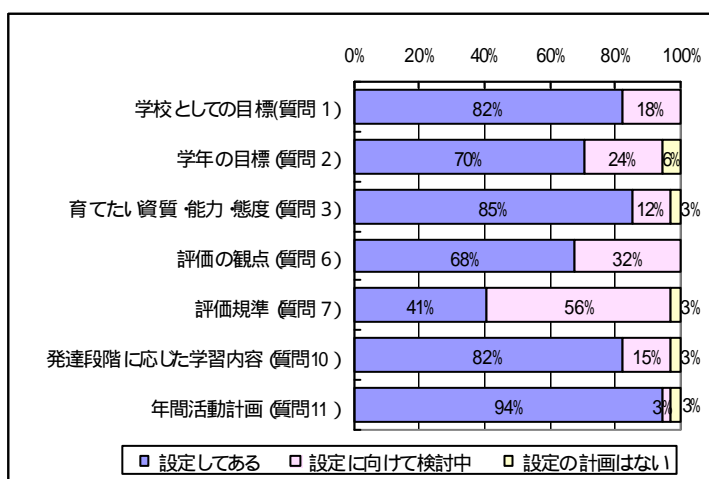


図2 カリキュラムの整備状況(中学校)

育てたい資質・能力・態度を何に基づいて設定したか。 (質問4)\*複数回答

## 学習指導要領のねらいに基づいて設定したのは、 小学校約9割、中学校約8割

育てたい資質・能力・態度を設定するに当たり、学習指導要領に示された「『総合的な学習の時間』のねらい」に基づいて行っている学校は、

小学校90%、中学校76%

である。また、「自校で定める目標や内容」に基づいて設定している学校は、

小学校46%、中学校47%

で、その中のほとんどの学校は、学習指導要領のねらいと組み合わせている。

一方、「各教科等の目標や内容との関連」を明確にして設定している学校は、

小学校28%、中学校18%

である(図3、4)。

学習指導要領のねらいには、児童生徒に身に付けさせたい資質や能力、学び方等が示されており、それらを具体化して設定した学校が多いことが分かる。しかし、教科等の目標や内容との関連を明確にして設定

している学校は、小・中学校ともに割合が低い。これは、試行期間も含めたこれまでの間に、学年ごとに各教科等のねらいや内容を分析し、「育てたい資質・能力・態度」として具体化するといった時間が十分にとれなかったためではないかと考えられる。

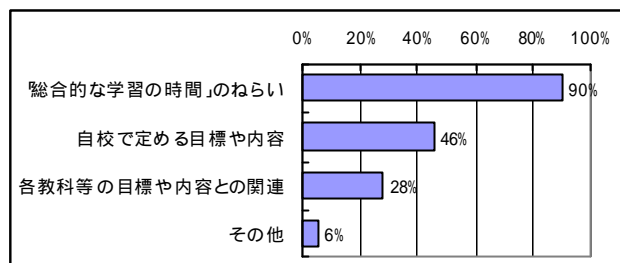


図3 育てたい資質・能力・態度の設定で基にしたもの(小学校) 複数回答

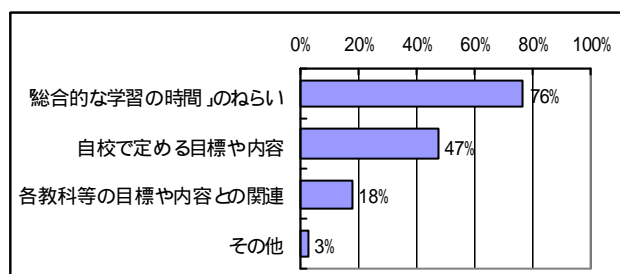


図4 育てたい資質・能力・態度の設定で基にしたもの(中学校) 複数回答

各学年の年間活動計画が作成してあるか。 (質問11の内訳)

## 小・中学校とも7割が、学校全体で系統的に作成

年間活動計画は、ほとんどの小・中学校で作成されている。その中で、職員間の共通理解の下に、学年の発達段階を踏まえて、「学校全体で系統的に作成」しているのは、

小学校71%、中学校74%

である(図5)。

このことから、約3割の小・中学校では、学習内容等において、学年間のつながりが図られていない様子がうかがえる。

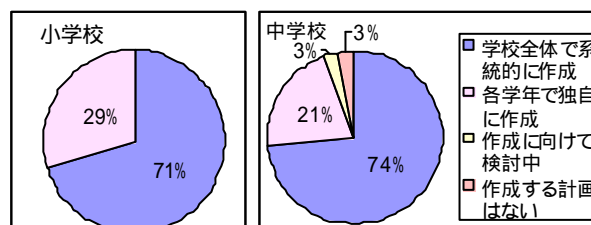


図5 年間活動計画の作成状況

各単元のねらいや学習内容と各教科等との関連はどのように図られているか。(質問12)

小学校の約5割は、「年間活動計画に位置づけている」  
 中学校の約5割は、「各教科担任と連絡を密にしている」

「総合的な学習の時間」と各教科等との関連をどのように図っているかを見ると、小学校では、主に

年間活動計画に位置づけている(54%)

各単元計画の中に示されている(35%)

適宜単元を入れ替えている(35%)

ことによって関連を図っている(図6)

これに対し、中学校では、明文化されてはいないが、主に、

各教科担任と連絡を密にしている(53%)

適宜単元を入れ替えている(32%)

ことによって関連を図っている(図7)

このような小・中学校間の取組の差は、学級担任制と教科担任制との違いによるものと考えられる。

小学校では、学級担任が各教科等の指導を行う場合が多く、「総合的な学習の時間」のカリキュラム全体との関連を視野に入れて、それぞれの年間計画を立てやすい。これに対し、

中学校では、各教科担当ごとに年間計画を立てて実施することが多く、学年ごとに行う「総合的な学習の時間」の計画や実施の時期とずれが生じてくる。そのため、計画段階よりも実施中に両者の関連や時期の調整を図ろうとしているものと思われる。

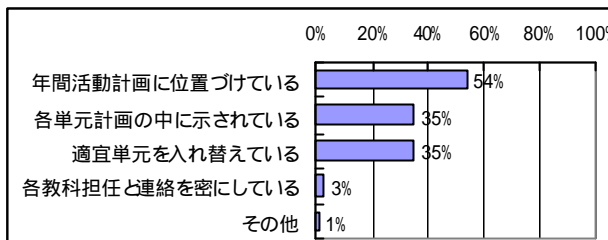


図6 各教科等との関連の図り方(小学校)

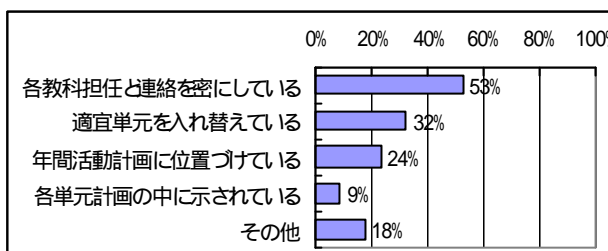


図7 各教科等との関連の図り方(中学校)

● 課題

以上の結果から、県内小・中学校における「総合的な学習の時間」のカリキュラム全体の整備状況に関して、次のような課題を挙げることができる。

「総合的な学習の時間」における**学校としての目標や学年としての目標**を設定する。

学習内容や指導内容を教科等との関連から分析し、**具体的な評価規準**を作成する。

・評価規準がまだ作成されていない学校が、小学校で約4割、中学校で約6割見られる。

・「育てたい資質・能力・態度」を設定するに当たり、教科等との関連を明確にしている学校は、小学校で3割、中学校で2割と低い。

年間計画の作成では、**各教科等との関連**を明確にし、**学年の発達段階**を踏まえて学習内容に系統性をもたせる。

・「総合的な学習の時間」と各教科等との関連について、中学校では、年間活動計画に位置付けている学校が2割、単元計画の中に示している学校が1割と低い。

「総合的な学習の時間」の**全体計画**を作成し、**学校としてのカリキュラムを整備**する。

## 2 評価の観点、評価規準

### ● 結果と考察

評価の観点が「設定してある」場合の記述内容について (質問6)

### 「課題設定力」「問題解決力」「関心・意欲・態度」 「学習への主体的・創造的な態度」の重視

評価の観点についての記述は、小学校38校(56%)、中学校16校(47%)から回答があった。それらを、表現の仕方は異なるが意味の近い観点到に集約し、図8、9のような観点到にまとめた。図中の観点是、「教育課程審議会答申」(平成12年12月4日)に例示された11の観点和それら以外に複数校から回答のあった観点を挙げている。

比較的回答数の多い観点是、

問題解決力

(小学校61%、中学校50%)

学習への関心・意欲・態度

(小学校55%、中学校50%)

課題設定力

(小学校47%、中学校56%)

自己の生き方を考える

(小学校37%、中学校44%)

学習への主体的・創造的な態度

(中学校63%)

である。これらは、先の「育てたい資質・能力・態度」の設定と同様に、主に学習指導要領のねらいに基づいて設定した傾向がうかがえる(図8、9)。

設定してある観点的数は、2~12と、学校によってまちまちである。また、ほとんどの学校では3~5つの観点が設定されており、4つの観点を設定している学校が、54校中26校と最も多い。これは、教科における評価の観点的数を参考にして設定したものである。

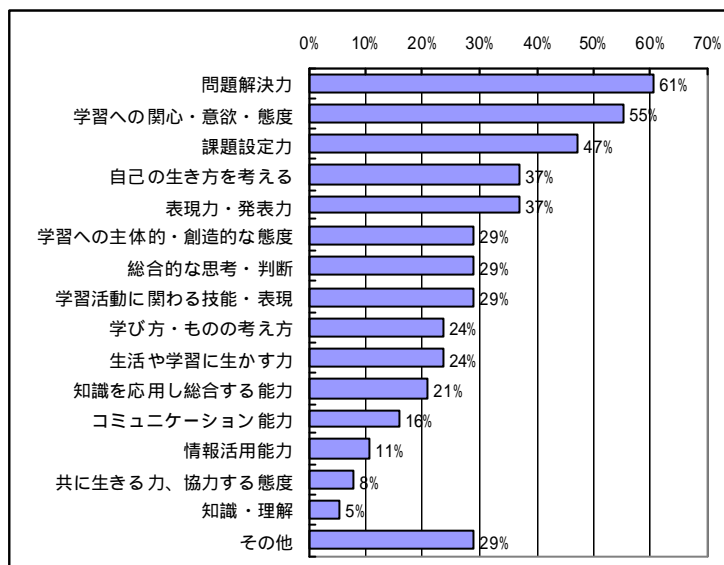


図8 設定してある評価の観点的(小学校)複数回答

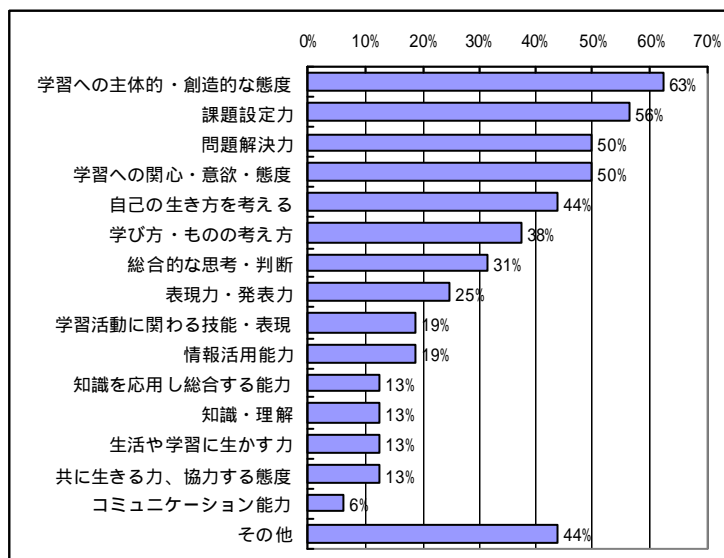


図9 設定してある評価の観点的(中学校)複数回答

注:図8、図9中の「その他」の記述例

企画力、計画・立案、創意・工夫、実践力、行動力、進め方、研究内容、研究発表、感じる力、考える力、伝え合う力、人や他のよさに気付く豊かな心、集団へ寄与、つなげる、成長・進歩、学習の振り返り、他

発達段階に応じた評価規準が設定してあるか。 (質問8)  
 学習過程ごとの評価規準が設定してあるか。 (質問9)

## 「発達段階に応じた評価規準」の設定は、 小学校で約6割、中学校で約4割

評価規準の設定状況について詳しく見ると、学年の「発達段階に応じた評価規準」が設定してあると回答した学校は、  
 小学校61%、中学校41%  
 である。

また、問題解決的なプロセスで組まれている単元計画等で、「学習過程ごとの評価規準」が設定してあると回答のあった学校は、  
 小学校47%、中学校29%  
 である(図10、11)。

これらは、前述の「育てたい資質・能力・態度」の設定や「年間活動計画」の作成状況と比べると、割合が低い。このことから、学習内容については、学年ごとに配列されているが、評価規準については、まだ整備されていない様子がうかがえる。

発達段階や学習過程ごとの評価規準の作成には、教科等の目標や内容との関連からの分析が必要であり、多大な時間と労力がかかる。今年度も設定に向けて検討している学校が多く見られるのは、そのためと考えられる。

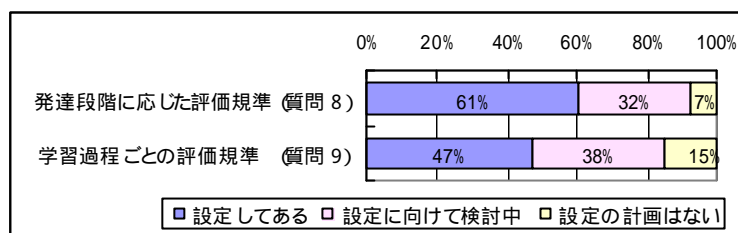


図10 発達段階や学習過程ごとの評価規準の設定状況 (小学校)

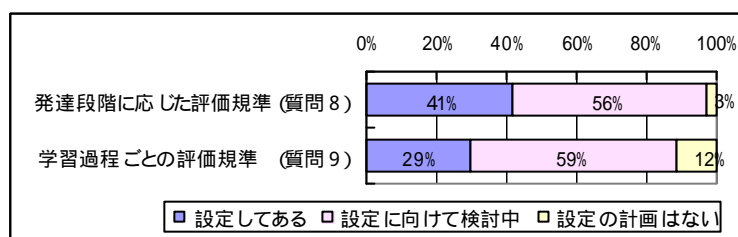


図11 発達段階や学習過程ごとの評価規準の設定状況 (中学校)

### ● 課題

評価の観点の設定や評価規準の作成に関して、次のような課題が挙げられる。

「育てたい資質・能力・態度」を教科等との関連から分析し、**学年の発達段階を踏まえた評価規準として具体化する。**

指導と評価の一体化を図るために、**問題解決的な学習過程の段階ごとに評価規準を作成する。**

### 3 評価方法

#### ● 結果と考察

どのような評価方法を取り入れているか。

(質問13) \*複数回答

#### 学習活動中の見取りや児童生徒の自己評価を重視

小・中学校とも同様の傾向が見られ、次のような評価方法が多く取り入れられている(図12、13)。

発表の様子

(小学校100%、中学校97%)

行動観察

(小学校99%、中学校100%)

ワークシート

(小学校97%、中学校91%)

自己評価

(小学校87%、中学校85%)

作品

(小学校84%、中学校62%)

ポートフォリオ

(小学校74%、中学校56%)

児童生徒の相互評価

(小学校59%、中学校50%)

多くの学校では、教師による観察や児童生徒の自己評価、相互評価によって、課題追究や活動の過程に着目したり、考え方や態度の変容、成長のあとを見取ろうとしたりしている様子が見られる。

一方、保護者からの評価や外部協力者からの評価、学習相談(面談)を行っている学校は、小・中学校とも1割程度と少ない(図12、13)。

この理由としては、外部の方々と打ち合わせをするための時間の確保が容易ではないことや評価の仕方について共通理解が図られていないこと等が考えられる。

#### ● 課題

個に応じた指導と評価の一体化を一層図るために、**学習相談(面談)**を取り入れる。

児童生徒の変容を多方面から見取るために、**保護者や外部協力者からの評価**を取り入れる。

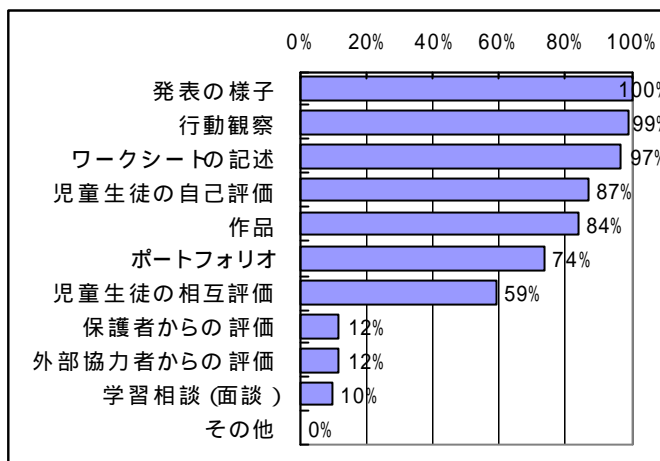


図12 主な評価方法(小学校) 複数回答

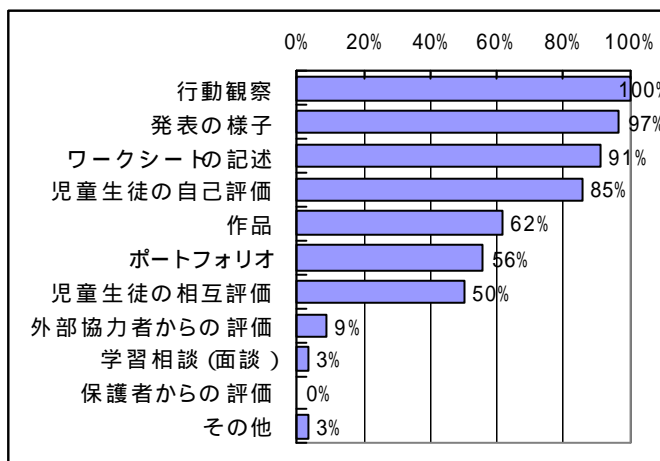


図13 主な評価方法(中学校) 複数回答

## 4 評価の活用について

### ● 結果と考察

評価をどのようなことに活用しているか。

(質問14)

小・中学校とも約7～8割が、「学習意欲の向上」「計画の修正」「指導の改善」「カリキュラム全体の見直し」に活用

学習の評価結果を「通知表や指導要録への記入」に活用している学校は、小・中学校とも100%である。また、「活用している」との回答が多い項目を挙げると、

児童生徒の学習意欲の向上  
(小学校83%、中学校85%)  
次時の準備や指導方法の改善  
(小学校80%、中学校76%)  
単元計画の修正や改善  
(小学校87%、中学校65%)  
カリキュラム全体の見直し  
(小学校69%、中学校71%)

である。約7～8割の学校で、形成的評価やカリキュラム評価に活用している様子が分かる(図14、15)。

これらに対し、「地域の人々や外部協力者への説明」に活用している学校は、小・中学校とも44%である(図14、15)。

先の評価方法と同様に、外部に向けて情報を発信するための環境や手段、方法がまだ整っていない様子が見えてくる。

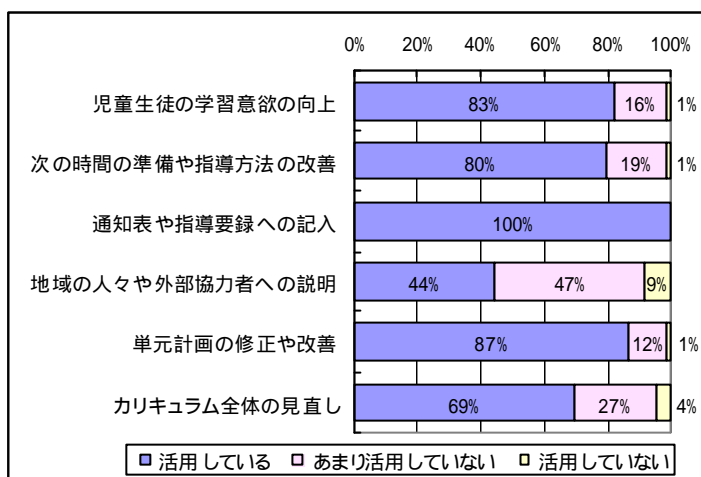


図14 評価の活用(小学校)

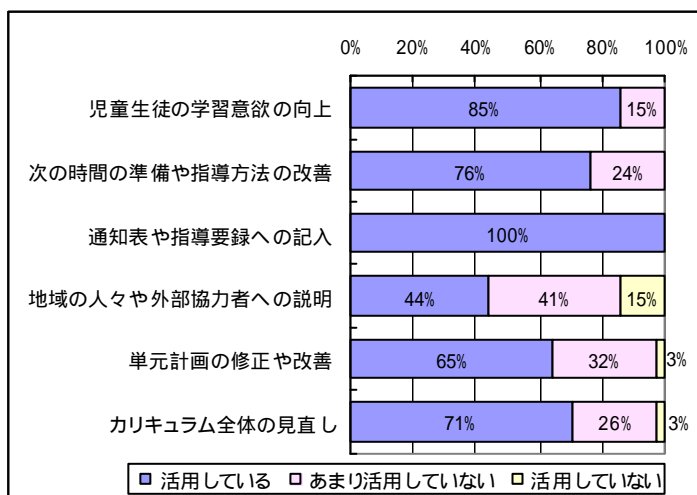


図15 評価の活用(中学校)

### ● 課題

児童生徒の学習評価を単元計画の修正や改善、カリキュラム全体の見直しに活用する。学習成果の発表とともに児童生徒の学習評価についても地域の人々や外部協力者に説明し、一層の理解と協力を得るように努める。



# 学習成果としての児童生徒の変容

## ● 結果と考察

これまでの取組を通して、学習成果としての変容した姿が、学校全体の児童生徒にどの程度見られるようになってきたか。(質問15)

### 情報収集力、活用力、コミュニケーション力に向上が見られる

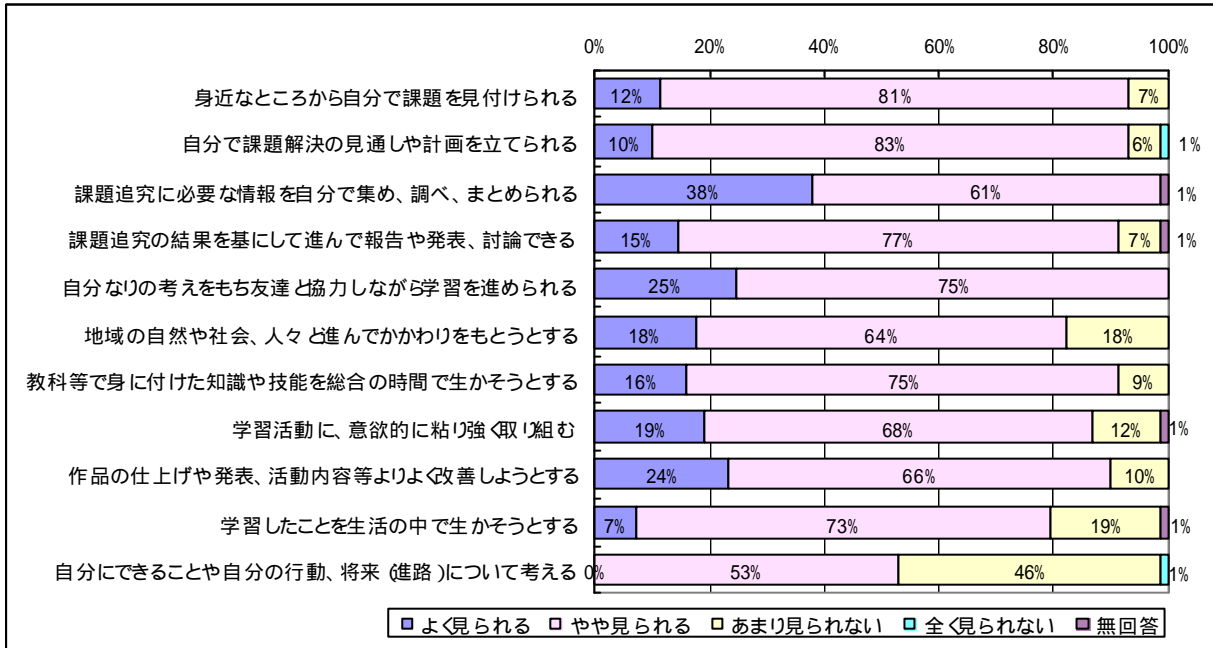


図16 学習成果としての児童の変容した姿(小学校)

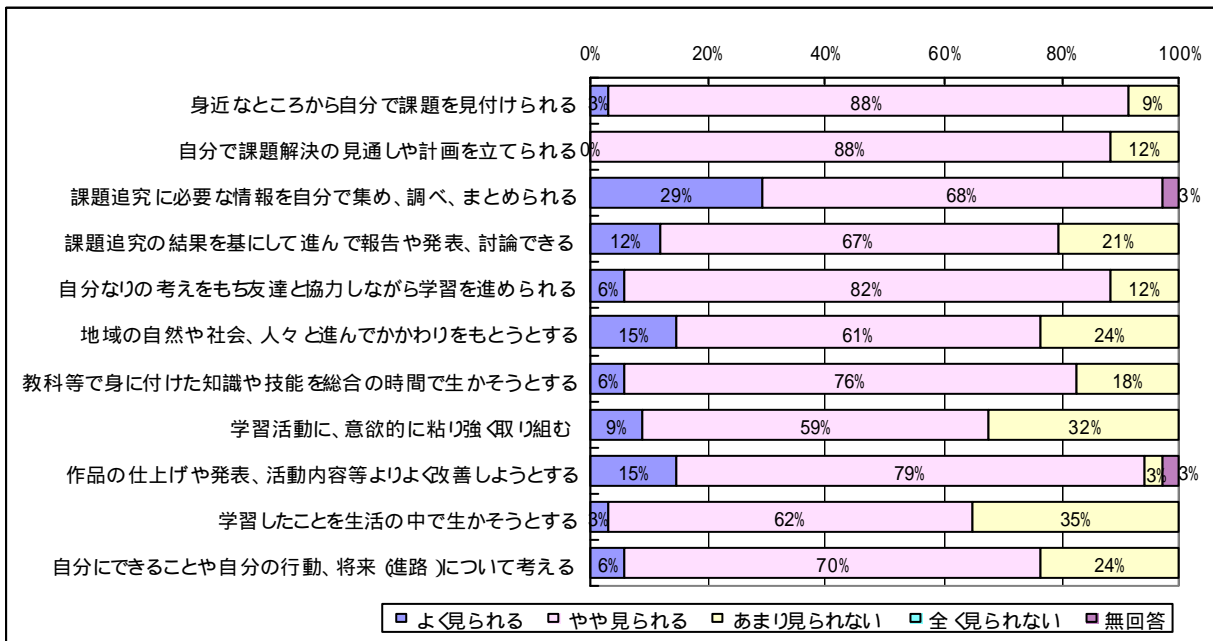


図17 学習成果としての生徒の変容した姿(中学校)

### (1) 小学生に見られる変容 (図16)

「よく見られる」と回答した学校が多い項目を挙げると、

- 情報を自分で集め、調べ、まとめられる (38%)
- 自分の考えをもち、友達と協力して学習を進められる (25%)
- 作品、発表、活動内容をよりよく改善しようとする (24%)
- 学習活動に意欲的に粘り強く取り組む (19%)
- 地域の自然や社会、人々と進んでかかわりをもとうとする (18%)

等である。これは、時間的なゆとりが保障された中で、コンピュータの活用や地域での調査、見学などの調べ学習、グループ学習、発表会等が、多く取り入れられてきたためと思われる。

一方、「あまり見られない」「全く見られない」を含む)との回答が多い項目は、

- 自分にできることや自分の行動、将来について考える (47%)
- 学習したことを生活の中で生かそうとする (19%)

等である。また、「地域の自然や社会、人々と進んでかかわりをもとうとする」姿でも18%の学校が回答している。こうした資質や能力、態度は、身に付いて表面化するまでに時間を要するため、学習の成果や児童生徒の変容の見取りが難しかったものと思われる。

### (2) 中学生に見られる変容 (図17)

全項目中、「よく見られる」との回答が多いのは、小学校と同様に、

- 情報を自分で集め、調べ、まとめられる (29%)
- 作品、発表、活動内容をよりよく改善しようとする (15%)
- 地域の自然や社会、人々と進んでかかわりをもとうとする (15%)

等である。これらに対し、「あまり見られない」との回答が多い項目は、

- 学習したことを生活の中で生かそうとする (35%)
- 学習活動に意欲的に粘り強く取り組む (32%)
- 自分にできることや自分の行動、将来について考える (24%)
- 地域の自然や社会、人々と進んでかかわりをもとうとする (24%)

等である。特に、「地域の自然や社会、人々とのかかわり」に関しては、学校間で成果のあらわれに差が見られる。中学校でも、学習したことがすぐに実生活に生かされていない様子や「自己の生き方」を考える態度に結び付いていない様子が見られる。また、小学校に比べて学習意欲があまり見られないのは、発達段階における年齢的な特徴のあらわれとも考えられるが、小・中学校間での活動内容の重複や学習内容に対する興味、関心の度合いにも関係していると思われる。

### (3) 全体的な傾向

全体的には、小・中学校とも各項目で「やや見られる」との回答が多い。これは、先に見たように、「評価規準」がまだ作成されていない学校が、小学校で約4割、中学校で約6割見られることにも関連していると考えられる。評価規準が設定されていなければ、評価の基準や判断があいまいとなり、「やや見られる」との回答が多かったものと思われる。

## ● 課題

「身に付けたことを学習や生活の中で生かす態度」や「自己の生き方考える態度」の育成を一層重視する。

個に応じた指導と的確な評価が行えるように、評価規準を踏まえて、**評価の判断基準**を明らかにする。

# 育てたい資質・能力・態度の学校外部への説明

## ● 結果と考察

育てたい資質・能力・態度について、誰に向けて説明したか。（質問5）\*複数回答

### 児童生徒に対する説明は、小学校約7割、中学校約9割

学校としての育てたい資質・能力・態度についての説明では、

児童生徒（小学校69%、中学校91%）

保護者（小学校75%、中学校79%）

に対して行っている学校が多い（図18、19）。

小学校では、児童よりも保護者に対して説明した割合が高く、中学校では、保護者よりも生徒に対して説明した割合が高い。これは、発達段階を踏まえた指導や支援によるものと考えられ、中学校では、生徒に学習のねらいや意図をつかませて学習の動機付けを図ろうとしている様子が見られる。

一方、学校外部に対して説明している割合は、

外部協力者（小学校37%、中学校38%）

地域の人々（小学校25%、中学校29%）

他校の教師（小学校18%、中学校15%）

と少ない。

また、「説明はしていない」という学校も、

小学校15%、中学校3%

見られる（図18、19）。

学習内容によっては、外部の協力者や地域の人々に講師や調査活動の協力を依頼する場合もあり連携が必要になってくる。しかし、調査結果によると、学校からの情報発信が十分に行われておらず、学校外部との連携や共通理解が図られていない様子が見られる。また、学校間の情報交換についても同様の傾向が見られる。

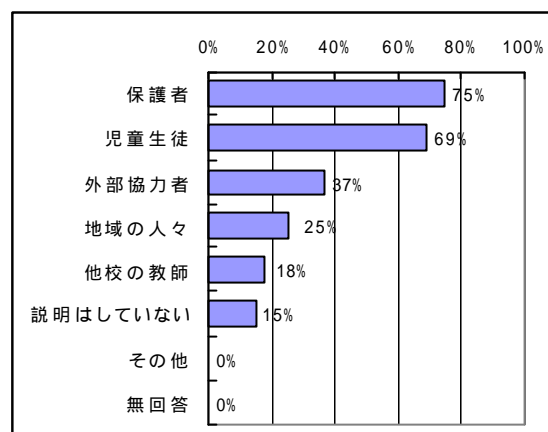


図18 育てたい資質・能力・態度の説明対象（小学校）複数回答

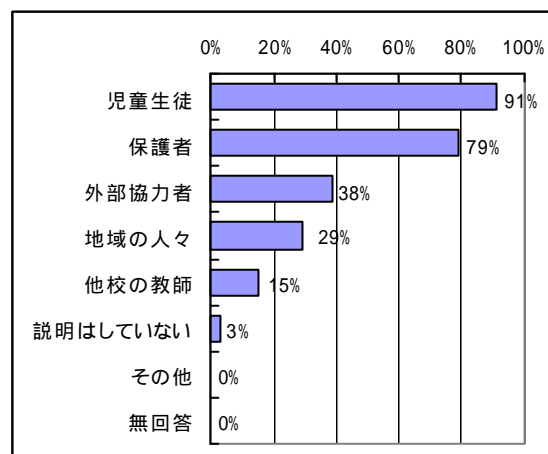


図19 育てたい資質・能力・態度の説明対象（中学校）複数回答

## ● 課題

学習のねらいや活動内容とともに育てたい資質・能力・態度について、学校としての方針を地域の人々や外部協力者にも伝える工夫をする。

自校の取組について、近隣の学校間で情報交換を行い、連携を図る。

## 充実と改善に関する課題

### ● 結果と考察

次年度の改善に向けて、どのような観点からの見直しが必要と思うか。 (質問16)

### 「学習内容」「指導」「単元の開発と計画」 「評価」等の見直しが必要

次年度の計画・立案に向けて見直しが必要と思われる観点では、

学習内容に関すること  
(小学校75%、中学校62%)

評価に関すること  
(小学校71%、中学校68%)

指導に関すること  
(小学校49%、中学校62%)

単元の開発や計画に関すること  
(小学校66%、中学校50%)  
を挙げた学校が多い(図20、21)。

このことから、多くの学校では、これまでに開発してきた単元や活動内容、指導内容等が、児童生徒の実態に適しているかどうかを見直し、この時間の充実を図ろうとしている様子が見える。

一方、回答の割合が低いのは、  
分掌組織に関すること  
(小学校7%、中学校9%)  
他校種とのつながりに関すること  
(小学校6%、中学校15%)

である(図20、21)。

前述の「学校間での情報交換があまり行われていないこと」や、次ページの学校課題に見られる「職員間の共通理解や協働体制がなかなか図れないこと」から考えると、「分掌組織」や「他校種とのつながり」に関する割合が、やや低いように思われる。これは、多くの学校で、「総合的な学習の時間」の見直しに関するだけでなく、学校改善や教育活動全体の充実に向けて取り組むべき課題が多いためではないかと考えられる。

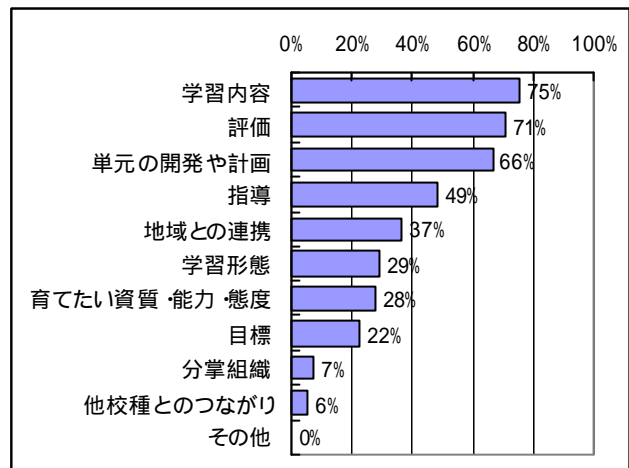


図20 見直しが必要と思う観点(小学校) 複数回答

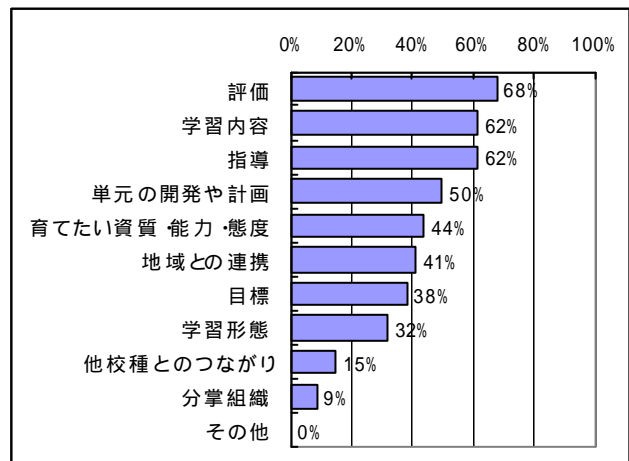


図21 見直しが必要と思う観点(中学校) 複数回答

**教科等との関連や学年の系統性を図ること、  
指導内容や体制等を工夫することが課題**

表 総合的な学習の時間、の充実や改善に関する学校課題(複数回答)

充実や改善に向けた学校課題		小学校 (%)		中学校 (%)	
学習内容	発達段階や学年の系統性からの見直し	2.0	6.6	2.3	6.3
	教科等との関連を図る	1.8		1.3	
	課題やテーマの見直し、活動内容の充実	2.0		2.0	
	体験的な活動の見直しや充実	0.7		0.7	
指導	指導・支援の内容や方法の工夫、改善	3.4	6.1	2.7	5.1
	指導体制の工夫(担当人員、外部講師との連携)	2.5		1.7	
	学習したことを生かす場の工夫	0.2		0.7	
年間計画	単元の開発	0.2	3.6	0.3	3.3
	年間計画の改善、単元の配列	2.5		1.3	
	配当時間、時間の設定、時間割の工夫	0.9		1.7	
評価	評価規準の作成、評価方法の工夫	2.0	2.2	2.0	3.3
	評価の活用(意欲の向上、指導の改善に生かす)	0.2		1.3	
協働体制(情報交換や共通理解の時間、教師の意識変革)		2.3		3.0	
学習環境	資料の整備、活用の工夫	0.7	2.5	0.0	1.6
	教材、教具や情報機器の充実	0.5		1.3	
	安全対策(校外活動での安全確保、引率者の補償)	1.1		0.0	
	交通手段、費用、移動時間	0.2		0.3	
地域との連携	人材や素材の活用、体験の場の確保	1.1	1.6	1.3	1.6
	説明責任	0.5		0.3	
学校としての目標の見直し		0.5		0.3	

注:表中の数字は、記述のあった学校数の割合(%)を表す。

「総合的な学習の時間」の充実や改善に関する学校課題について、小学校44校(65%)、中学校30校(88%)から記述があった。それらを集約して上の表のようにまとめた。

その主な内容を見ると、

学習内容に関すること(発達段階や教科等との関連からの見直し等)

指導に関すること(指導や支援の内容、方法の改善、指導体制の工夫等)

年間計画に関すること(学年の系統性を図る、3年間を見通した計画の工夫等)

評価に関すること(評価規準の作成、評価方法や評価の活用の仕方の工夫等)

などが挙げられている。これは、今までに開発してきた単元計画や学習内容、指導内容等について、適宜、児童生徒の実態に応じて修正、改善する必要があるためと思われる。

また、充実や改善に向けて「教師間で話し合う時間が十分とれないこと」や「共通理解が図りにくいこと」「資料や情報機器等の充実」「校外活動での安全の確保」「移動時間がかかる」「地域の人材や素材の活用」等を挙げる学校も見られた。学校によって抱えている課題が様々で多岐にわたっている様子が見える。

## ● 課題

学習内容や年間計画、指導、評価等に関する見直しでは、**各教科等との関連や発達段階を踏まえた学年の系統性を図る。**

**教職員間の共通理解や協働体制を図ることや学校間の情報交換、地域との連携に着目し、校内の分掌組織を機能的に働かせるようにする。**

## まとめ

群馬県内小・中学校における「総合的な学習の時間」の充実と改善に向けて、「7つのすすめとポイント」「3つの緊急アピール」を示します。

- 1 全体計画を作成し、カリキュラムを整備しましょう。**  
特に、**学校や学年の目標の設定**  
**評価計画の作成**（観点、規準、方法、実施時期）  
**学習内容の見直し**（教科等との関連、学年の発達段階や系統性）  
が大切です。
- 2 自校の取組を点検、評価（カリキュラム評価）しましょう。**  
計画 実施 評価 改善の検討のサイクルで、カリキュラム全体を見直し、**学校の取組の現状や課題**について、教職員間の共通理解を図ることが大切です。
- 3 育てたい資質・能力・態度を明確にし評価規準を作成しましょう。**  
特に、**各教科等の目標や内容との関連**を図り  
**学年の系統性や発達段階**を踏まえて  
育てたい資質・能力・態度を分析し、**評価規準**に具体化することが大切です。
- 4 「自己の生き方を考える態度」「学習したことを生活に生かす態度」の育成を一層重視しましょう。**  
特に、**小学校6年間**（生活科と関連）、**中学校3年間の見通し**  
**小・中学校のつながり**  
に着目して、学習内容や体験的な活動、指導計画を改善することが大切です。
- 5 学校と家庭や地域との連携をさらに推進しましょう。**  
学校の取組や成果、課題等について**積極的に情報発信し、理解と協力、評価**を得ることが大切です。
- 6 学校間の情報交換や連携をさらに推進しましょう。**  
特に、**校区内小・中学校間での情報交換**  
**他校種との学校間交流**  
によって、学びのつながりを重視し学習効果を高めることが大切です。
- 7 教職員間の共通理解と協働体制づくりに努めましょう。**  
全教職員の共通理解と協働体制の下で充実と改善が進められるように、校内の**分掌組織を機能**させることが大切です。

# 3つの緊急アピール

## カリキュラム全体の見直し

全教職員の協働意識とPDCAのマネジメントサイクルで、自校の取組を点検・評価しましょう！

## 全体計画の作成

目標、育てたい資質・能力・態度、評価計画、学習内容（主な活動計画や内容系列表）の設定等自校のグランドデザインを決めましょう！

## 評価規準の作成

児童生徒の学習状況を的確に評価し、個に応じたきめ細かな指導に生かしましょう！